

就園・就学の準備

2008/10/04 神戸定例会

藤坂龍司

1. 幼稚園・保育園への入園に向けて

2, 3才から家庭療育を開始して、これから幼稚園・保育園へ、とされている親御さんへ

(1) 入園までに身につけたいスキル

<最低限必要なこと>

- ・動作が模倣できること
- ・簡単な指示に従えること
- ・おむつが取れていること

<できればできておいた方がいいこと>

- ・回りの子どもの動きに合わせられること
- ・5分くらい、一カ所にじっとしていられること
- ・5分くらい、静かにしていられること
- ・順番が守れること
- ・2, 3語文で自分の意志を伝えられること
- ・並行遊びができること（他の子のそばで、同じような道具を使った遊びができること）
- ・簡単な関わり遊び（おにごっこ、ままごと）ができること

ロヴァースによるプリスクール入園基準

(シャドー付き)

- ①動作の模倣ができること
- ②簡単な指示に従えること
- ③2, 3語文で話せること
- ④適切なおもちゃ遊びができること
- ⑤自分でトイレに行けること

(2) どうやったら身につけられるか

<サークルタイム課題>

家庭で、家族やセラピストに協力してもらって、小さなクラスを再現する。

一人が先生役になり、残りが生徒になって、子どもを交えて輪になって座る。

アメリカのプリスクールの「サークルタイム」のように、先生に当てられて順番に何かを答えたり、ゲームをして遊んだりする。

大人の一人が子どものそばに付添い、プロンプトと強化を担当しよう。

主な課題

- ・名前を呼ばれて返事をする
- ・名前を呼ばれたら質問に答える
- ・指定された話題（例えば自分の好きな食べ物）について順番に答えていく
- ・分かった人は手を挙げて、指名されたら答える
- ・順番のある簡単なゲームをする

<ピア・トレーニング>

近所の同年代またはやや年長の子どもに来てもらって、遊びを通じた関わりや会話などの練習をする。

最初は大人がそばにいて、子どもをプロンプト&強化すると共に、ピアに対しても指示&強化をする。

主な課題

- ・ピアの動作をまねする
- ・ピアの指示に応える
- ・ピアの呼びかけに応える
- ・ピアの質問に答える
- ・ピアの後を追って（あるいは手をつないで）移動する
- ・ピアの遊びの誘いに応える
- ・ピアに簡単な要求を伝える
- ・ピアと並行遊びをする
- ・ピアと簡単な関わり遊び（ボール遊び、鬼ごっこ、ままごとなど）をする
- ・ピアと代わりばんこに何かをする
- ・ピアと簡単な会話をする

<プリスクール>

家庭療育を半年から1年くらい行なって、初級課題がほぼクリアできたら、家庭療育を継続しながら、幼稚園入園前の子どもを対象にした、民間の子ども教室や体操教室などに入れてみる。このときできるだけ親またはセラピストが「シャドー」として付添う。

主な課題

- ・回りの動きに合わせて動く
- ・指定された場所（自分の椅子など）でじっと静かにしてられる
- ・先生や友達のあいさつや声かけに応える
- ・自分からあいさつする
- ・先生に注目し、先生の動作をまねできる
- ・先生の指示を聞き取り、それに応える
- ・先生や他の子の援助を受け入れる
- ・自分の番が来たら、他の子と同じことができる
- ・他の子と関わり遊びができる
- ・他の子とことばのやりとりができる

(2) 幼稚園選び

幼稚園には大きく分けて「自由保育」のところと、「設定保育」のところとがある。

自由保育とは、教師がカリキュラムを設定せず、子どもに自由に遊ばせる、という保育方針。公立幼稚園に多い。

設定保育とは、教師がカリキュラムを設定して、それに従って子どもに工作をさせたり、音楽を教えたりする。私立幼稚園に多い。

自閉症児は、することが決まっていた方が適応しやすいので、一般に設定保育の方が向いていると言われる。しかし設定保育を取る私立幼稚園には、合奏、書道、絵、英語、など、いろんな「習い事」を教えることを売り物にしているところが多い。そういうところでは能力の低い自閉症児は足手まといになり、邪魔者扱いされがち。

設定保育と自由保育の間のような、緩やかな設定保育を取るところがあればベストかも。

(3) 付き添い

よほど状態がいい場合を除いて、幼稚園には親かセラピストが「シャドー」として付き添った方がよい。幼稚園入園までに、自力で健常児の集団の中でうまくやっていた状態になっている子はほとんどいないはずだから。

<付き添いの交渉>

幼稚園に親が付き添うことはまだしも認められやすい。セラピストによる付き添いは現状では非常に難しい。公立だと親の付き添いは比較的認められやすいが、私立では園長の一存で決まってしまうので、拒否されやすい。

付き添いを認めてもらう交渉は、前年の夏から。公立の場合、まず園長を訪問し、正直に事情を説明して、理解を求めよう。その後で教育委員会にも出向き、同様のお願いをする。いずれもA4、1、2枚の文書を用意すること。夫婦で出向いた方がよい。文書の中に、「園内で見聞きしたことを決して外部に漏らさない」旨、誓約しておくこと。私立の場合は教委へのあいさつは必要ないだろう。

<シャドーの心得>

- ・担任のすることに口を出さない
- ・園で見たことを他の親に漏らさない
- ・園や担任への要求は控えめに。過大な期待はしない
- ・他の子どものこと（いじめなど）に口を出さず、わが子の援助に徹する
- ・最初は始終子どものすぐそばに。担任はすぐに親を引き離そうとするが、いつ離れるかはあなたが決めるべき。
- ・子どもへの声かけは最小限にして、「無言のプロンプト&ささやき強化」に徹する。子どもが自発的に行動できるようになることを目指す。

<シャドーの主な課題>

- ・待っている間、静かにじっとさせておく（静かにしていることをプロンプト&強化）
- ・他の子どもの動きに注意を促し、同じことをさせる
- ・先生の指示に注目させ、指示に応えさせる。先生の動作をまねさせる
- ・自分の順番に注意させ、順番が来たら促されなくても適切な行動ができるようにする
- ・自由時間、他の子どものそばで同じ遊びをさせる（並行遊び）
- ・他の子どもが関わってきたら、適切な反応をプロンプト
- ・他の子どもにアプローチする方法を教える
- ・他の子どもと協力して何かをすることを教える

2. 小学校への入学に向けて

(1) 入学先の選択－普通学級・特別支援学級・特別支援学校（養護学校）－

入学前年の冬に行なわれる自治体の「就学相談」で振り分けが行なわれ、「特別支援学校が相当」などの通知が来る。しかしいまは多くの自治体で、親の意向が尊重され、親が「それでも普通学級に」、と強く希望すれば認められることが多い（法的には学校側に決める権限がある）。

文部省も数年前の特殊教育から特別支援教育への移行にあたって、障害児になるべく健常児と共に学ぶ機会を与える、という方針を打ち出している。

いったん特別支援学級に入ってしまうと、途中で普通学級に変わるのは非常に難しい。養護学校から普通の小学校に移るのもまず無理。逆に普通学級から特別支援学級や養護学校に途中で移るのは比較的簡単。また中学まで特別支援クラスに在籍していると、たとえ高機能児でも普通の高校には取ってもらえないらしい。

だから選択は慎重に。

<普通学級のデメリット>

普通学級の最大のデメリットはいじめがあること。特に女子の場合は、小学校3、4年生頃から激しくなる。特にある程度社会性も知能もあるタイプが標的になりやすい。場合によっては不登校では済まず、自殺にまで追い込まれるので、よほど注意深く守ってあげないといけない。

男子の場合は、比較のおおらか。

もう一つのデメリットは、学業についていったり、クラスでおとなしく過ごすのが大変なこと。遅れがあると、みんなにバカにされるので、自信を喪失してしまいやすい（二次障害）。これは男子にも言えること。

<普通学級のメリット>

メリットは言うまでもなく、健常児の社会に適応するための機会がふんだんにあること。それはそのまま将来、健常者の社会に適応するための訓練につながるはず。

<特別支援学級・養護学校のデメリット>

最大のデメリットは、学業をほとんど教えてくれないこと。教師にはそのノウハウもない。粘土遊びをしたり、歩行訓練をしたり、外出訓練と称して公園に連れて行ったり、要は遊ばせているだけ。託児所と変わらないところが多い。

もう一つのデメリットは、健常児と隔離されること。養護学校に行ってしまうと、健常児と交わる機会は全くない。忘れ去られてしまう。特別支援クラスの場合は、交流学級の機会も多いが、特別クラスに在籍している、というだけで、健常児からは「あちらの世界」と思われ、仲間とは扱われない。

<特別支援学級・養護学校のメリット>

メリットは、健常児のいじめから守られること。自信をなくすこともなく、比較的のんびり過ごすことができる。

人員の配置も手厚いので、スタッフの支援は受けられやすい。かといって大したことを教えてもらえるわけではないが、少なくとも脱走、事故、他害などは防げるだろう。

特別支援クラスの場合は、そこに在籍しておいて、授業の半分以上を普通クラスで受けることも可能。その際、特別支援クラスの介助員が授業に付き添ってくれる。

<結局、どうすれば？>

養護学校は、現実問題として福祉就労に有利、というメリットがあるが、そのためには中学部、高等部になってから編入すれば十分間に合う。実際、たくさんの子が中学、高校になってから養護学校に流れてくる。小学部から養護学校に入る子はよほど重度か、親のあきらめがよいケース。だから小学部から養護学校に行く必要はあまりない。

とすると、選択肢は小学校普通クラスか特別支援クラスかに絞られてくる。普通学級でやっていける可能性があると思うなら、一年生は取り合えず普通学級で、子どもの状態に合わせて付き添いつき添いなしでやってみて、学年が変わるときに、無理そうなら特別支援クラスに移る、というのがよさそう。特別支援クラスに移っても、引き続き「交流学級」と言うことで普通学級の授業は受けられる。

普通学級でやっていけそうにない場合や普通学級在籍では付き添いがつけられない場合は、特別支援クラスに最初から在籍し、交流学級を最大限に利用するとよいだろう。

(2) 小学校での付き添い

発達障害児が普通学級に在籍する場合、自治体によっては子どもに介助員をつけてくれる。また特別支援クラスに在籍しながら交流学級で普通クラスの授業に参加する場合、特別支援クラスに所属する介助員が付き添うことが多い（特別支援学級在籍の方が介助員が付きやすい）。

しかし学校側がつける介助員は、ABA的に接してはくれない。細かな連絡も難しい（親と直接接触が禁止されていることも多い）。

ABA的な援助のできるシャドーをつけたいと思うなら、親が直接付き添うしかないのが現状。

幼稚園でシャドーの実績があると、比較的認められやすい。

<交渉の仕方>

幼稚園と基本的に同じ。前年の夏にまず小学校を訪れ、校長先生に要望を伝えよう。その後で教育委員会にも要望を伝える。いずれも同じ文書を用意すること。あとは返事待ち。返事が3月末までずれ込むこともあるが、下手に動いても仕方ないので、じっと待つ。騒ぐと、「うるさい存在になりそう」と思われ、付き添いを拒否されかねない。

「子離れできていないだけ」と思われやすいので、子どもにとって必要がなくなり次第、付き添いを徐々になくしていくつもりであることを伝えよう。

<親が付き添うメリット>

学校での進度や先生の教え方がわかるので、それに合わせて家で予習復習ができる。

学校では個別に教えてはくれない。学業はすべて家で教える覚悟が必要。

学校での子どもの状態を直接見ることができるので、何が足りないかを正確に把握できるし、その場でプロント&強化することができる。

他の子どものいじめや差別から子どもを守ることができる

(2) 入学までに身につけたいスキル（特に普通学級の場合）

幼稚園に関して挙げたものに加えて、

- ・ひらかな、カタカナ、数字の読み
- ・ひらかな、カタカナ、数字の書き

・数の概念（50まで数えられる。「いくつ？」で20まで正確に答えられる。「〇個ちょうだい」に10個まで正確に対応できる）

- ・「一番こだわり」「完璧こだわり」をなくしておく
- ・周りが静かなときは、自分も静かにしていただける
- ・自分の役割を理解し、それを果たすことができる
- ・同年代の子どもとルールのある遊びができる
- ・他の子どもと協力して作業ができる
- ・よい・わるいの判断ができる

(3) そのために何をすればいいか

読み書き・数などのアカデミックスキルは、家庭で半年から1年ほど先行して教えておく。

学校生活の訓練は、幼稚園・保育園の生活それ自体が小学校の準備になっているので、それ以上の「学校ごっこ」などをする必要はあまりないはず。

幼稚園でのシャドー、ピア・トレーニングなどを継続することが一番。

家庭療育も力を緩めずに、コンプライアンスはしっかり確保しておくこと。妙なこだわりを発展させないよう、気をつける。

幼稚園の間に、子どもの語彙は急速に増える。先生が子どもたちに使う言葉もそれに合わせて難しくなるので、それに合わせて言葉を増やしていく必要がある。「約束」などの抽象概念の理解も。

<家庭での主な課題（就学前の一年間）>

- ・ひらかな・カタカナ・数字の読み
- ・ひらかな・カタカナ・数字の書き
- ・数の概念、一桁の足し算
- ・いろんな言葉や概念を増やす
- ・知識を増やす
- ・会話応答
- ・文をつなげて長い文章を作る（それで～、だから～）
- ・自分の経験や知識（道順など）を順序だって説明する
- ・長い指示を理解できる
- ・動作の持続
- ・長い作業に集中して取り組める（塗り絵、お絵かき、折り紙、学習プリントなど）
- ・不意打ちで指示を出しても、聞き取れる
- ・声をかけられたら、振り向いて応える
- ・相手を見て大きな声であいさつする